張炎『詞源』卷上譯注稿（四）

明木茂夫

十二律呂

十二律、各有五音、演而爲宮爲調。律呂之名、總八十四、分月律而屬之。今雅俗祗行七宮十二調、而角不預焉。

十二律は、各(おのおの)五音有り、演(の)べて宮と爲(な)り調と爲(な)る。律呂の名は、總(す)べて八十四、月律に分けて之(これ)に屬す。今の雅俗は祗(た)だ七宮十二調を行ふのみにして、角は焉(これ)に預(あづ)からず。

黃鍾宮	大雪中聲	黃鍾宮	俗名 下宮同	正黃鍾宮	ム
黃鍾商	子之氣	黃鍾角		大石調	マ
黃鍾角	十一月 陽律	黃鍾變		正黃鍾宮角	ー
黃鍾變	冬至正聲	黃鍾徵		正黃鍾宮變徵	乚
黃鍾徵	二字同用	黃鍾羽		正黃鍾宮正徵	人
黃鍾羽		黃鍾閏		般涉調	フ
黃鍾閏				大石角	丨

七

大呂宮
㋐す
二字同用

小寒中聲
丑之氣
十二月　陰呂
大寒正聲

大呂宮
大呂商
大呂角
大呂變
大呂徵
大呂羽
大呂閏

俗名
高宮
高大石調
高宮角
高宮變徵
高宮正徵
高般涉調
高大石角

㋐
㋑
㋒
ㄅ
ㄆ
ㄇ
ㄈ

太簇宮
マす
二字同用

立春中聲
寅之氣
正月　陽律
雨水正聲

太簇宮
太簇商
太簇角
太簇變
太簇徵
太簇羽
太簇閏

俗名
中管高宮
中管高大石調
中管高宮角
中管高宮變徵
中管高宮正徵
中管高般涉調
中管高大石角

マ
ー
ㄴ
ㄉ
ㄈ
ㄌ
㋐

夾鐘宮
㋑す
二字同用

驚蟄中聲
卯之氣
二月　陰呂
春分正聲

夾鐘宮
夾鐘商
夾鐘角
夾鐘變
夾鐘徵
夾鐘羽
夾鐘閏

俗名
中呂宮
雙調
中呂正角
中呂變徵
中呂正徵
中呂調
雙角

㋑
ㄅ
ㄆ
ㄈ
㋒
ㄇ
マ

八

姑洗宮 一

清明中聲
辰之氣
三月　陽律
穀雨正聲

姑洗宮	俗名	中管中呂宮 一
姑洗商		中管雙調 乙
姑洗角		中管中呂角 ㇇
姑洗變		中管中呂變徵 ㇀
姑洗徵		中管中呂正徵 ㇂
姑洗羽		中管中呂調 ㇃
姑洗閏		中管雙角 ㇄

仲呂宮 ㄅ

立夏中聲
巳之氣
四月　陰呂
小滿正聲

仲呂宮	俗名	道宮 ㄅ
仲呂商		小石調 ㄟ
仲呂角		道宮角 ㄈ
仲呂變		道宮變徵 ㄐ
仲呂徵		道宮正徵 ㄙ
仲呂羽		正平調 ㄇ
仲呂閏		小石角 ㄧ

蕤賓宮 ㄴ

芒種中聲
午之氣
五月　陽律
夏至正聲

蕤賓宮	俗名	中管道宮 ㄴ
蕤賓商		中管小石調 ㄉ
蕤賓角		中管道宮角 ㄓ
蕤賓變		中管道宮變徵 ㄔ
蕤賓徵		中管道宮正徵 ㄚ
蕤賓羽		中管正平調 ㄞ
蕤賓閏		中管小石角 ㄅ

九

林鍾宮
人

小暑中聲
未之氣
六月　陰呂
大暑正聲

林鍾宮　俗名　南呂宮　人
林鍾商　歇指調　フ
林鍾角　南呂角　川
林鍾變　南呂變徵　㋐
林鍾徵　南呂正徵　マ
林鍾羽　高平調　ー
林鍾閏　歇指角　レ

夷則宮
㋖

立秋中聲
申之氣
七月　陽律
處暑正聲

夷則宮　俗名　仙呂宮　㋖
夷則商　商調　川
夷則角　仙呂角　ム
夷則變　仙呂變徵　マ
夷則徵　仙呂正徵　㋑
夷則羽　仙呂調　ケ
夷則閏　商角　人

南呂宮
フ

白露中聲
酉之氣
八月　陰呂
秋分正聲

南呂宮　俗名　中管仙呂宮　フ
南呂商　中管商調　川
南呂角　中管仙呂角　㋐
南呂變　中管仙呂變徵　㋑
南呂徵　中管仙呂正徵　ー
南呂羽　中管仙呂調　レ
南呂閏　中管商角　㋖

無射宮　寒露中聲　無射宮　俗名　黄鍾宮　㐅
㐅　戌之氣　無射商　越調　ム
九月陽律　無射角　黄鍾角　マ
霜降正聲　無射變　黄鍾變徵　ー
無射徵　黄鍾正徵　ク
無射羽　羽調　人
無射閏　越角　フ

應鍾宮　立冬中聲　應鍾宮　俗名　中管黄鍾宮　川
川　亥之聲　應鍾商　中管越調　㋐
十月陰呂　應鍾角　中管黄鍾角　㋑
小雪正聲　應鍾變　中管黄鍾變徵　ク
應鍾徵　中管黄鍾正徵　レ
應鍾羽　中管羽調　㋕
應鍾閏　中管越角　㋓

（六b～十一a）

一一

【校記】（番號については末尾の【諸本一覽】を參照）

［六表］叢編本甲乙は「五音宮調配屬圖」の前に題目として「十二律呂」の一行を插入する。⑨叢編本甲b本は「有」の一字を脱す。⑩祇＝祗（呉本）、祇（叢編甲本）

［七表］④**ム乆**（底本・范本・守本・粤本ab・楡本・思賢本・呉本ab・疏證本ab・叢編本甲ab乙・國本）＝**乆乆**（靜嘉本・宛本）　○正黄鍾宮變徵＝正黄鍾宮轉徵（范本・范本・粤本ab・楡本・思賢本・呉本ab・疏證本ab・叢編本甲ab乙）、正黄鍾轉徵（靜嘉本・宛本・守本・國本）　⑥叢編乙本は「宮」の下の小字雙行注を「十一月陽律冬至正聲」と一行に右寄りに組む。他の箇所は「十二月大寒陰呂正聲」の如し。

○疏證本ab・叢編甲ab乙本は以下、各行末の八十四調の結聲字譜の下に小字雙行で律呂名と工尺をの注を插入する。なお、各行末の八十四調の結聲字譜については、本來各調の結聲が決まれば自動的に決まる性質のものである。その異同は基本的に各本の字體、書寫の際の書き癖等に關わるものだと見なせる。

［七裏］①**ⓜⓢ**（守本・疏證本ab・叢編本甲ab乙・國本）＝**ⓜす**（范本・粤本ab・楡本・思賢本・呉本ab）、**ⓢⓢ**（靜嘉本・宛本）　⑥靜嘉本は行頭に「太」の一字を置く。⑨**マす**（疏證本ab・叢編本甲ab乙）＝**マⓢ**（底本・范本・守本・粤本ab・楡本・思賢本・呉本ab・國本）、**ⓢマ**（靜嘉本）、**ⓢⓢ**（宛本）

［八表］④驚＝京（靜嘉本・宛本）　⑥**㊀す**二字同用（疏證本ab・叢編本甲ab乙）＝**㊀ⓢ**二字同用（底本・范本・粤本ab・楡本・思賢本・呉本ab）、**㊀**（靜嘉本・宛本・守本・國本）（守本・國本は「此下疑脱夾鍾清聲**す**字竝注」を插入する。）　⑪中管中呂宮（底本・范本・守本・粤本ab・楡本・思賢本・呉本ab・疏證本ab・叢編本甲ab乙・國本）＝中筦中呂宮（靜嘉本・宛本）

［八裏］①中聲（疏證本ab・叢編本甲ab乙）＝正聲（底本・靜嘉本・宛本・范本・守本・粤本ab・楡本・思賢本・呉本ab・國本）（底本を含む諸本「正聲」に作るも、今疏證本・叢編本に從い改める）　③中管中呂變徵（底本・范本・守本・粤本ab・楡本・思賢本・呉本ab・疏證本ab・叢編本甲ab乙・國本）＝中管呂變徵（靜嘉本・宛本）　⑤穀＝谷（靜嘉本・宛本）　⑥洗＝法（呉本）　⑨仲呂商＝中呂商（叢編本甲ab）　⑩仲呂角＝中呂角（叢編本甲ab）

［九裏］⑦陰呂＝陸呂（呉本ab）

［十表］⑤夷則閏＝則則閏（叢編本甲ab）　⑧中管商調（靜嘉本・宛本・守本・疏證本ab・國本）＝中管雙調（底本・范本・粤本ab・楡本・思賢本・呉本ab・叢編本甲ab乙）

［十裏］①陰呂＝除呂（宛本）　②中管商角（守本・疏證本ab・叢編本乙・國本）＝中管仙角（底本・靜嘉本・宛本・范本・粤本ab・楡本・思賢本・呉本ab・叢編本甲ab）（底本を含む諸本「仙角」に作るも、今守本・疏證本・叢編本乙に從い改める）　⑤戌之氣＝戌之氣（靜嘉本・

思賢本）

［十一表］②亥之氣＝午之氣（靜嘉本・宛本）　⑦中管越角（靜嘉本・宛本・守本・國本）＝中管越調（底本・范本・粤本ａｂ・楡本・思賢本・呉本ａｂ・疏證本ａｂ・叢編本甲ａｂ乙）（底本を含む諸本「越調」に作るも、今靜嘉本・宛本・守本・國本に従い改める）

【注】

十二律呂各有～角不預焉

○律呂之名　ここでは各律呂の均に屬する宮調の名を指す。十二の律呂の均にそれぞれ七聲を主音とする調式が成立するので、十二の七倍で合計八十四種類の宮調となる。

○月律　十二律呂は一年の十二箇月や十二支に配當される。詳細は本譯注稿（二）第二條「陽律陰呂合聲圖」を參照。十二律呂の各均に成立する宮調もそれに從ってそれぞれの月に屬することとなる。

○七宮十二調　十二律呂それぞれに七聲を配して理論上は八十四調が成立するが、その全てが實際に用いられるわけではない。隋唐以來の燕樂では二十八調が用いられたことが知られている。『詞源』では第十一條「宮調應指譜」に示される如く、當時の詞樂で用いられる調を七宮十二調、計十九調であるとしている。

○角不予焉　燕樂では角調は用いられない。徵調も同樣に用いられないが、實際は徵調は新音階（下徵調）の宮調で讀み替えられる。これと同樣に變徵調は新音階の角調で讀み替えられるので、角調を立てる必要がない。詳細は第十三條「結聲正訛」を參照。

黃鍾宮～應鍾宮（一覽表）

○大雪中聲・冬至正聲～立冬中聲・小雪正聲　「大雪・冬至」「立冬・小雪」等はいずれも二十四節氣の名。一年を黃道上の太陽の位置により二十四等分し、それぞれに付された季節を表す名前が二十四節氣。原則として各月には節（節氣）と中（中氣）が含まれ、本條では十二律呂それぞれが配當される月の「節」を「中聲」、「中」を「正聲」として、各律呂に表示している。十二律呂と一年の月との對應については、第二條「陽律陰呂合聲圖」を參照。各律呂の二十四節氣との對應は次の如し。

律呂	節月	節	中
黄鍾	十一月	大雪中聲	冬至正聲
大呂	十二月	小寒中聲	大寒正聲
太簇	一月	立春中聲	雨水正聲
夾鍾	二月	驚蟄中聲	春分正聲
姑洗	三月	清明中聲	穀雨正聲
仲呂	四月	立夏中聲	小滿正聲
蕤賓	五月	芒種中聲	夏至正聲
林鍾	六月	小暑中聲	大暑正聲
夷則	七月	立秋中聲	處暑正聲
南呂	八月	白露中聲	秋分正聲
無射	九月	寒露中聲	霜降正聲
應鍾	十月	立冬中聲	小雪正聲

○子之氣～亥之氣　「子」～「亥」は十二支。十二律呂それぞれに配當される十二支の氣を示している。十二律呂と十二支との對應については、第二條「陽律陰呂合聲圖」を參照。

○陽律・陰呂　十二律呂の内奇數番目が陽律、偶數番目が陰呂。第二條「陽律陰呂合聲圖」を參照。

○二字同用　管色字譜の内、八度上の音符が用意されている音、即ち黄鍾（合・六）、大呂（下四・下五）、太簇（四・五）、夾鍾（下一・尖五）について、それぞれどちらも結聲として使用できることを示す注記。その他の字譜については八度上の音符は用意されていないのでこうした注記の必要はなく、全て字譜が一つずつ表示されている。

【通釋】

本條の價値はやはり、理論上成立する十二均・七調式合計八十四に渉る全ての宮調に對してその俗名が記されている點である。第十一條「宮調應指譜」にある通り、詞樂に用いられる宮調は七宮十二調であると、『詞源』は認めている。宮調の律呂名は○○均○○調式の形式で表示され、

その調が實際の樂曲に用いられるか否かに係わらず、理論上成立する全ての宮調に規則的に命名することができる。一方俗名の命名規則は律呂名のように整然とはしていない。また俗名という性質上、實際の樂曲に用いられない調には調名を付けない、という考え方も可能である。ところが本條のようにまず八十四調の律呂名を全て竝べた場合、俗名もそれに對應して全て置かなければならなくなる。このことは、樂曲の演奏という實際上の意味よりむしろ、そこに宮調俗名の命名の規則を抽出できるという樂理上の意味合いが極めて大きい。一見して明らかなように、宮調俗名の命名には異なる複數の要因が關係している。以下、俗名の命名の要因を整理する。

宮調俗名を通覽して氣づくのは、ある調の名前に對して「中管～」や「高～」の接頭語を冠した調名が多いということである。今假に、「中管～」や「高～」の接頭語を付ける元となる基準の調を「正調系」と呼び、「中管～」を冠したものを「中管調系」、「高～」を冠したものを「高調系」、「中管～」と「高～」を雙方とも冠したものを「中管＋高調系」と、それぞれ呼ぶことにした上で。十二の均を整理するならば次のようになる。

正調	中管調系	高調系	中管＋高調系
黄鍾均			
		大呂均	
			太簇
夾鍾均			
	姑洗均		
仲呂均			
	蕤賓均		
林鍾均			
夷則均			
	南呂均		
無射均			
	應鍾均		

一五

例えば「夾鍾均」と「姑洗均」との關係を見るに、

中呂宮　↓　中管中呂宮
雙角　↓　中管雙角

の如く、夾鍾均の宮調名に単純に接頭語「中管」を冠したものになっている。一方「黄鍾均」と「大呂均」については、

大石調　↓　高大石調
般渉調　↓　高般渉調
大石角　↓　高大石角

の三つは接頭語「高」を冠したものとなっているものの、

正黄鍾宮　↓　高宮
正黄鍾宮角　↓　高宮角
正黄鍾宮變徵　↓　高宮變徵
正黄鍾宮正徵　↓　高宮正徵

の四つは嚴密にはそうなっていない。しかしこれらが「黄鍾宮」を「宮」と略稱したものだと考えれば、

正黄鍾宮　↓　高黄鍾宮
正黄鍾宮角　↓　高黄鍾宮角
正黄鍾宮變徵　↓　高黄鍾宮變徵
正黄鍾宮正徵　↓　高黄鍾宮正徵

の如く、基本的に「正」↓「高」の對應になっていると考えられ、やはり「黄鍾均」の俗名に對して接頭語「高」を冠していると言ってよい。

またこれらの調の音程關係については、「中管」はその元となる均に對して一律（半音）高い均の調、「高」もその元となる均に對して一律（半音）高い均の調となっている。但し「高」が付くのは「大呂均」のみである。さらに「中管」と「高」が同時に冠せられるのは「太簇均」のみで、結果として「中管＋高」の「太簇均」は「黄鍾均」に對して二律（二度）高くなっている。

次に各均に成立する各調式の關係について。ここにもある一定の命名規則が認められる。以下整理する。

1、宮調式と角調式

原則として、宮調式の名稱に「角」を付したもの、もしくは宮調式の名稱の「宮」を「角」に變更したものが角調式の名稱になっている。

宮調式		角調式
黄鍾均	正黄鍾宮、↓	正黄鍾宮角、
大呂均	高宮 ↓	高宮角、
太簇均	中管高宮 ↓	中管高宮角、
夾鍾均	中呂宮、↓	中呂正、角
姑洗均	中管中呂宮、↓	中管中呂角、
仲呂宮	道宮 ↓	道宮角、
蕤賓宮	中管道宮 ↓	中管道宮角、
林鍾均	南呂宮、↓	南呂角、
夷則均	仙呂宮、↓	仙呂角、
南呂均	中管仙呂宮、↓	中管仙呂角、
無射均	黄鍾宮、↓	黄鍾角、
應鍾均	中管黄鍾宮、↓	中管黄鍾角、

この内「姑洗均」については「中呂宮、角」や「中呂角、」ではなく、わざわざ「中呂正、角、」と言っているが、これは新音階から讀み替えた角調ではなく、本来の律呂調の角調だと斷っているのだと考えられる。このことは、「姑洗均」は七宮十二調には含まれず、この均に屬する調は實際の樂曲には用いられないため、本來名稱は用意されておらず、後付けで付けられた名稱であることを想像させる。なぜなら、次に述べる如く、本條で「〜角」と稱する宮調は全て新音階の角調であり、それが基本であるからこそ、本來の律呂名の角調であることを斷る必要が生ずるからである。

2、商調式と閏調式

原則として、商調式の名稱の「調」を「角」に變更したものが閏調式の名稱になっている。

商調式		閏調式
黄鍾均	大石調、 ↓	大石角、
大呂均	高大石調、 ↓	高大石角、
太簇均	中管高大石調、 ↓	中管高大石角、
夾鍾均	雙調、 ↓	雙角、
姑洗均	中管雙調、 ↓	中管雙角、
仲呂宮	小石調、 ↓	小石角、
蕤賓宮	中管小石調、 ↓	中管小石角、
林鍾均	歇指調、 ↓	歇指角、
夷則均	商調、 ↓	商角、
南呂均	中管商調、 ↓	中管商角、
無射均	越調、 ↓	越角、
應鍾均	中管越調、 ↓	中管越角、

この「角」は新音階の角調で、律呂音階では變徵調式である。段安節『樂府雜録』の「別樂識五音輪二十八調圖」に言う「商角同用」はこれと同じ事を述べている。

3、外來語の漢語轉寫に由來する調名等、言い換えれば、他の調に對して接頭語・接尾語を付され出來たのではない調名は、商調式と羽調式に現れる。

商調式	羽調式
黄鍾均	大石調
夾鍾均	雙調
仲呂均	小石調
林鍾均	歇指調
夷則均	商調
無射均	越調
	般涉調
	中呂調
	正平調
	高平調
	仙呂調
	羽調

4、見かけ上は律呂名と同じ形式を備える調名、即ち律呂調にも同じ名稱が存在する俗名は「中呂宮」「南呂宮」「黄鍾宮」の三つである。見かけ上あたかも律呂調であるかのような名稱を持つ調は以下の三つである。

夾鍾宮　＝　中呂宮
林鍾宮　＝　南呂宮
無射宮　＝　黄鍾宮

律呂名にも「仲（中）呂宮」「南呂宮」「黄鍾宮」という調名は存在するが、その音高は俗名の示す調とは異なる。

この名稱は、宋代の燕樂の律が唐代のそれよりも二律（二度）高いことに由來する。沈括『夢溪筆談』巻六「樂律上」一一四條（『補筆談』巻一「樂律」五三二條も同じ）に、

今之燕樂止有十五聲。蓋今樂高於古樂二律以下、故無正黄鍾聲。（今の燕樂止だ十五聲有るのみ。蓋し今樂古樂より高きこと二律以下にして、故に正黄鍾の聲無し）。

とあり、古樂（唐律）よりも今樂（宋律）は「二律以下」（二律弱）高いとされている。即ち、

唐律	黄	大	太	夾	姑	仲	蕤	林	夷	南	無	應	
宋律			黄	大	太	夾	姑	仲	蕤	林	夷	南	無	應

ということである。俗名「仲呂宮」を例に擧げるならば、律呂名「夾鍾宮」が俗名「仲呂宮」と呼ばれる理由は、唐以降用いてきた「仲呂宮」という本來の宮調は、宋の律に照らすと「夾鍾宮」に當たる。

故に、宋現在「夾鍾宮」と呼ぶべき宮調は、

従來からの習慣に従って「仲呂宮」という調名を俗名として用いる。

と説明できる。「林鍾宮」の俗名「南呂宮」、「無射宮」の俗名「黄鍾宮」についても同様である。

さて右で見たような複數の命名規則が絡んでいる宮調の俗名であるが、それがいずれの均にどのように現れるかを整理するに、やはり七宮十二調が中心になっていることを見逃せない。今一度、「正調系」と「中管調系」「高調系」とを竝置し、その内七宮十二調の含まれる均に○印を付してみるならば、

	正調	中管調系	高調系	中管＋高調系
○	黄鍾均			
○			大呂均	
				太簇
○	夾鍾均			
		姑洗均		
○	仲呂均			
		蕤賓均		
○	林鍾均			
○	夷則均			
		南呂均		
○	無射均			
		應鍾均		

となる。七宮十二調は常に、○印の均の内の宮調・商調・羽調である。

以上のことを要するに、外來語の漢語轉寫に由來する特徴的な名稱や唐の律との誤差を踏まえた讀み替えによる名稱は、基本的に七宮十二調に現れ、その他の宮調の名稱は原則としてそれに對する接頭語の付加・語尾の變更などの方式で規則的に決められる、と大雑把に言うことができる。このことは、既に触れたように、張炎の列舉する八十四調は必ずしも全てが體系的に竝行して命名されたものではなく、多用される調の調名が先にあり、實際は用いられない調には後付けで規則に準じて名前が付けられた、ということを想像させるものである。「大呂均」は「黄鍾均」に對して「高〜」の接頭語を冠する形になっているとは言いながら、「大呂宮」のみは「高黄鍾宮」や「高正黄鍾宮」ではなく「高宮」と、やや略稱して熟(こな)れた名稱になっているが、これもやはり「高宮」が七宮の一つであり、實際に多用された調だからなのであろう。

【補足】

本條と同樣、理論上成立する十二均・七調式合計八十四を列擧した一覽表としては、（南宋）陳元靚撰『事林廣記』が擧げられる。本條と『事林廣記』との違いは、

・本條が十二律呂の各均毎にその均の七聲宮調を展開している、つまり同一均に屬する平行調が竝記されているのに對し、『事林廣記』は十二律呂毎に同じ律呂を主音（結聲）とする七つの宮調を展開している、つまり主音の音高を同じくする同主調を竝記していること。

・本條が八十四調の全てに俗名を記しているのに對して、『事林廣記』は十二律呂それぞれの「宮調」「商調」「羽調」「閏（變徵）調」の四調（計四十八調）にのみ俗名を記していること。

である。日本の樂人の間では『詞源』よりむしろ『事林廣記』の方が廣く參照されている。そこで參考の爲に、『事林廣記』「律生八十四調」の全宮調を整理して左に圖示する。元至順刊本『新編纂圖增類群書類要事林廣記』後集「音譜類・楽星図譜・律生八十四調」（中國史料系編『中國音樂史料 四』鼎文書局一九七五）及び元禄十二年刊本『新編群書類要事林広記』戊集巻之九「楽星図譜・律生八十四調」（『和刻本類書集成』汲古書院一九七六）により文字を校勘し、さらに原書の工尺字譜を十二律呂に置き換え、對應する七聲を添えてある。

二一

黄	宮	黄	商	黄	角	黄
					變	徵
太	商	太	角	太	變	大
				夾	徵	夾
姑	角	姑	變	姑	羽	姑
		仲	徵	仲	羽	仲
蕤	變	林	羽	林	閏	林
林	徵	夷	閏	夷	宮	夷
夷	羽	南	宮	南	商	南
南	閏	無	宮	無	角	無
無	宮	應	商	應	變	應
應	閏					
律名 黄鍾宮		律名 夷則角		律名 蕤賓變		呂名 仲呂徵
俗呼 正宮		俗呼 越調				

黄	徵	黄	羽	黄	閏	黄
					宮	大
太	羽	太	閏	太	商	
		夾	宮	夾	角	夾
姑	閏			姑	變	姑
仲	宮	仲	商	仲	徵	仲
				蕤	宮	蕤
林	商	林	角	林	變	林
		夷	變	夷	徵	夷
南	角	南	徵	南	羽	南
		無	羽	無	閏	無
應	變					應
律名 仲呂徵		律名 夾鍾羽		律名 大呂閏		
		俗呼 中呂調		俗呼 高大石角		

黄鍾 子

大	宮	大	商	大	角	大
					變	徵
太	商	夾	角	夾	變	夾
		姑	羽	姑	徵	姑
仲	角	仲	變	仲	羽	仲
蕤	變	蕤	徵	蕤	閏	蕤
林	徵	夷	羽	夷	閏	夷
南	羽	南	閏	南	宮	南
無	閏	無	宮	無	商	無
應	閏					應
呂名 大呂宮		呂名 應鍾商		呂名 南呂角		呂名 林鍾變
俗呼 正高宮		俗呼 中管越調				

大	徵	大	羽	大	閏	大
					宮	太
夾	羽	夾	閏			
		姑	宮	姑	商	姑
仲	閏					
蕤	宮	蕤	商	蕤	角	
林	商	夷	角	夷	變	林
夷	角	南	變	南	徵	夷
無	角	無	變			南
黄	變	應	徵	應	羽	應
呂名 蕤賓徵		律名 姑洗羽		律名 太簇閏		
		俗呼 中管中呂調		俗呼 中管高大石調		

大呂 丑

※無射商、元無射宮に作る

二二

太	宮	太	商	太	角	太
						夾
姑	商	姑	角	姑	變	姑
				仲	徵	仲
蕤	角	蕤	變	蕤	徵	蕤
		林	羽	林	羽	林
	變	夷	宮	夷	閏	夷
南	徵	南	羽	南	閏	南
				無	宮	無
應	羽	應	閏	應	角	應
		黃	宮	黃	商	黃
大	閏	大	變	大	徵	大
律名 太簇宮		律名 黃鍾商		律名 無射角		律名 夷則變
俗呼 中管高宮		俗呼 大石調				
太簇 寅						

太	閏	太	羽	太	徵	太
夾	宮					夾
		姑	閏	姑	羽	
仲	商	仲	宮			仲
				蕤	閏	
林	角	林	商	林	宮	林
						夷
南	變	南	角	南	商	
無	徵					無
		應	變	應	角	
黃	羽	黃	徵			黃
				大	變	
律名 無射角		律名 夷則變		呂名 林鍾徵		呂名 仲呂羽
						俗呼 正平調
太簇 寅						

夾	宮	夾	商	夾	角	夾
						姑
仲	商	仲	角	仲	變	仲
				蕤	徵	蕤
林	角	林	變	林	羽	林
		夷	徵	夷	羽	夷
南	變					南
無	徵	無	羽	無	閏	無
						應
黃	羽	黃	閏	黃	宮	黃
		大	宮	大	商	大
太	閏					
呂名 夾鍾宮		呂名 大呂商		呂名 應鍾商		呂名 南呂變
俗呼 中呂宮		俗呼 高大石				
夾鍾 卯						

夾	閏	夾	羽	夾	徵	夾
姑	宮					姑
		仲	閏	仲	羽	
蕤	商	蕤	宮			蕤
				林	閏	
夷	角	夷	商	夷	宮	夷
						南
無	變	無	角	無	商	
應	徵					應
		黃	變	黃	角	
大	羽	大	徵			大
				太	變	
律名 姑洗閏		律名 蕤賓羽		律名 夷則徵		呂名 南呂變
俗呼 中管双角		俗呼 中管正平調				
夾鍾 卯						

仲	宮	仲	商	仲	角	仲
蕤						
		林	角	林	變	林
夷	商	夷			徵	夷
			變	南		
無	角	無	徵	無	羽	無
黃	變	黃	羽	黃	閏	黃
大	徵				宮	大
		太	閏	太		
夾	羽	夾	宮	夾	商	夾

變	徵	羽	徵	閏	宮	仲
蕤	徵					
		林	羽	林	閏	林
夷	羽	夷	宮			夷
				南	閏	
無	閏	無	宮	無	商	無
應	宮					
		黃	商	黃	角	黃
大	商	大				大
			角	太	變	太
夾	角	夾	商		徵	夾
				姑	變	

呂名	呂名	呂名	呂名	呂名	呂名	呂名
仲呂宮	夾鍾商	大呂角	應鍾變	無射徵	夷則羽	蕤賓閏
俗呼	俗呼				俗呼	俗呼
道宮	双調				仙呂調	中管小石角

仲呂 巳

姑	宮	姑	商	姑	角	姑
仲						
		蕤	角	蕤	變	蕤
林	商	林			徵	林
			變	夷		
南	角	南	徵	南	羽	南
應	變	應	羽	應	閏	應
黃	徵				宮	黃
		大	閏	大		
太	羽	太	宮	太	商	太

變	徵	羽	徵	閏	宮	姑
仲	徵					
		蕤	閏	蕤	羽	
林	羽	林	宮			林
				夷	閏	
南	閏	南	商	南	宮	南
無	宮					
		應	角	應	商	
黃	商					黃
				大	角	
太	角	太	商			太
				夾	變	

呂名	呂名	呂名	律名	律名	律名	律名
仲呂閏	林鍾羽	南呂徵	無射變	黃鍾角	太簇商	姑洗宮
俗呼	俗呼				俗呼	俗呼
小石角	高平調				中管高大石	中管中呂宮

姑洗 辰

二四

林	宮	林	商	林	角	林
						夷
南	商	南	角	南	變	南
					徵	無
應	角	應	變	應		
		黄	徵	黄	羽	黄
大	變					
太	徵	太	羽	太	閏	太
					宮	夾
姑	羽	姑	閏	姑		
			宮		商	仲
蕤	閏					

呂名 林鍾宮

俗呼 南呂宮

呂名 仲呂商

俗呼 小石調

呂名 夾鍾角

呂名 大呂變

林鍾 未

林	閏	林	羽	林	徵	林
夷	宮					夷
		南	閏	南	羽	
無	商	無	宮			無
				應	閏	
黄	角	黄	商	黄	宮	黄
						大
太	變	太	角	太	商	
夾	徵					夾
		姑	變	姑	角	
仲	羽	仲	徵			仲
				蕤	變	

律名 夷則閏

俗呼 商角

律名 無射羽

俗呼 黄鍾羽

律名 黄鍾徵

蕤	宮	蕤	商	蕤	角	蕤
						林
夷	商	夷	角	夷	變	夷
					徵	南
	角	無	變	無		
			徵	應	羽	應
	變	黄				黄
大	徵	大	羽	大	閏	大
					宮	太
夾	羽	夾	閏	夾		
		姑	宮	姑	商	姑
仲	閏					

律名 蕤賓宮

俗呼 中管道宮

律名 姑洗商

俗呼 中管双調

律名 太簇角

律名 黄鍾變

蕤賓 午

蕤	閏	蕤	羽	蕤	徵	蕤
林	宮					林
		夷	閏	夷	羽	
南	商	南	宮			南
				無	閏	
應	角	應	商	應	宮	應
						黄
大	變	大	角	大	商	
太	徵					太
		夾	變	夾	角	
姑	羽	姑	徵			姑
				仲	變	

呂名 林鍾閏

俗呼 歇指角

呂名 南呂羽

俗呼 中管仙呂調

呂名 應鍾徵

※歇指角、元歇指調に作る

二五

夷 宮	夷 商	夷 角	夷 變	夷 徵	夷 羽	夷 閏
			南 徵			南 宮
無 商	無 角	無 變		無 羽	無 閏	
		應 徵	應 羽		應 宮	應 商
黄 角	黄 變			黄 閏		
	大 徵	大 羽	大 閏	大 宮	大 商	大 角
太 變			太 宮			
夾 徵	夾 羽	夾 閏		夾 商	夾 角	夾 變
		姑 宮	姑 商			姑 徵
仲 羽	仲 閏			仲 角	仲 變	
	蕤 宮	蕤 商	蕤 角		蕤 徵	蕤 羽
林 閏				林 變		
律名 夷則宮	律名 蕤賓商	律名 姑洗角	律名 太簇變	呂名 大呂徵	呂名 應鍾羽	呂名 南呂閏
俗呼 仙呂宮	俗呼 中管小石調				俗呼 中管黄鍾羽	俗呼 中管商角

夷則 申

南 宮	南 商	南 角	南 變	南 徵	南 羽	南 閏
			無 徵			無 宮
應 商	應 角	應 變		應 羽	應 閏	
		黄 徵	黄 羽		黄 宮	黄 商
大 角	大 變			大 閏		
	太 徵	太 羽	太 閏	太 宮	太 商	太 角
夾 變			夾 宮			
姑 徵	姑 羽	姑 閏		姑 商	姑 角	姑 變
		仲 宮	仲 商			仲 徵
蕤 羽	蕤 閏			蕤 角	蕤 變	
	林 宮	林 商	林 角		林 徵	林 羽
夷 閏				夷 變		
呂名 南呂宮	呂名 林鍾商	呂名 仲呂角	呂名 夾鍾變	律名 太簇徵	律名 黄鍾羽	律名 無射閏
俗呼 中管仙呂宮	俗呼 歇指調				俗呼 盤渉調	俗呼 越角

南呂 酉

宮	商	角	變	徵	羽	閏
			徵			宮
商	角	變		羽	閏	商
		徵	羽		宮	
角	變		閏			角
	徵		羽	閏	商	
變				宮		變
徵	羽	閏	商		角	徵
		宮				
羽	閏			商	變	羽
	宮				徵	
閏						閏

律名	俗呼
無射宮	黃鍾宮
夷則商	商調
蕤賓角	
姑洗變	
夾鍾徵	
大呂羽	高般涉
呂名	俗呼
應鍾閏	中管越角

無射　戌

應	閏	應	羽	應	徵	應
黃	宮					黃
		大	閏	大	羽	
太	商	太	宮			太
				夾	閏	
姑	角	姑	商	姑	宮	姑
						仲
蕤	變	蕤	角	蕤	商	
林	徵					林
		夷	變	夷	角	
南	羽	南	徵			南
				無	變	

律名	俗呼
黃鍾閏	大石角
太簇羽	中管高般涉
姑洗徵	
仲呂變	
林鍾角	
南呂商	中管商調
呂名	俗呼
應鍾宮	中管黃鍾宮

應鍾　亥

二七

【諸本一覽】（詳しくは詞源研究會編著『宋代の詞論―張炎「詞源」』中国書店二〇〇四を參照）

底本　清秦恩復輯『詞學叢書』（清刊、享帚精舍）所收本（立命館大學文學部所藏、鈴木虎雄舊藏本）

①静嘉本　清乾隆三［一七三八］年朗嘯齋影元鈔本（静嘉堂文庫所藏本、陸心源十萬卷樓舊藏本）

②宛本　清阮元輯『宛委別藏』（民國七〇［一九八一］年、台灣商務印書館刊）所收清嘉慶間阮元進呈影鈔元鈔本（立命館大）

③范本　清范鍇輯『范白舫所刊書』（道光間、烏程范氏刊）所收本（京都大）

④守本　清錢熙祚輯『守山閣叢書』（道光二三［一八四三］年序刊）所收本（立命館大）

⑤粤本　清伍崇曜輯『粤雅堂叢書』所收本

a、清刊本（立命館大）

b、『叢書集成新編』第八一册所收本（一九八三～八四年、新文豐出版公司影印本）

⑥楡本　清許增輯『楡園叢刻』所收本（嚴一萍輯『百部叢書集成』所收本）

⑦思賢本　『思賢書局所刻詞學書』（光緒年湖南思賢書局刊本）所收本（立命館大）

⑧吳本　吳梅校勘『詞源』二卷

a、民國七［一九一八］年再版、國立北京大學出版部刊（高知大學小島文庫藏本）

b、一九六八年、龍門書店用北京大學一九一八年再刊本影印

⑨疏證本　蔡楨疏證『詞源疏證』二卷

a、民國二一［一九三二］年、金陵大學中國文化研究所排印本

b、一九八五年、北京市中國書店用金陵大學一九三二年排印本影印

⑩叢編本（甲）　唐圭璋輯『詞話叢編』所收本

a、民國二三［一九三四］年序刊本

b、民國五九［一九七〇］年、廣文書局用一九三四年序刊本影印

⑪叢編本（乙）　同右、一九八六年、中華書局排印本

⑬國本　王雲五輯『國學基本叢書』（民國五七［一九六八］年、台灣商務印書館景排印）所收本

※既刊の譯注稿については以下を參照されたい。

張炎『詞源』卷上譯注稿（一）「五音相生」宋詞研究會『風絮』第7号所收（二〇一一）

張炎『詞源』卷上譯注稿（二）「陽律陰呂合聲圖」中京大學文化科學研究所『文化科學研究』Vol. 22 所收（二〇一一）

張炎『詞源』卷上譯注稿（三）「律呂隔八相生圖」中京大學文化科學研究所『文化科學研究』Vol. 23 所收（二〇一二）

張炎『詞源』卷上譯注稿（五）「律呂四犯」中京大學圖書館『中京大學圖書館學紀要』四〇號所收（二〇二〇）

※本稿は平成三十年度科學研究費補助金基盤研究（C）「南宋の文人歌曲創作論における轉調理論の研究」（18K00149）の研究成果である。